



# 家庭教育支援協会

会報誌 9号

## 葛藤のススメ

家庭教育支援協会理事長

二川早苗

私たちがよきものと考えていることが、実は、そうではないことがあります。たとえば、桜。入学式に見上げた満開の桜は、誠に風情があり、よき思い出として記憶する方も多いことでしょう。けれども、それは時代を遡れば、必ずしもそうではありませんでした。イデオロギーに翻弄された苦い記憶が歴史の彼方から蘇ってきます。

雨にしても、降ってもらわなければ私たちの生存に関わりますが、かといって災害をもたらすような豪雨では困ります。

このように、私たちは、自分の都合で自然の価値をはかってきました。自然だけでなく、封建時代には、村の道徳律というもののまで、共同体を守るための機能としてきました。そのような道徳律を日本の農山漁村を歩き、無字社会の日本として描いたのが、生涯、旅人であり続けた民族学者の宮本常一でした。

宮本は『庶民の発見』（講談社学術文庫 1987, pp.193-195.）のなかで、村の梵鐘について書いているくだりがあります。ある村で、大きな梵鐘をつくりましたが、大きすぎてそれを吊り下げることができませんでした。そこに、通りかかった村の子どもが、知恵を出しました。梵鐘に合わせて鐘楼をつくり、梁につないだ鐘の下を掘ってゆけば梵鐘はおのずと吊り下がると教えたのです。村人たちがその通りにしたところ、梵鐘は吊り下げることができました。ところが、この話は、ここで終わりません。村人は、その子どもを殺してしまったのです。なぜ、知恵を授けてくれた子どもを殺さねばならなかったのでしょうか。それは、封建社会では、庶民の秀でた才能は、武士にとってかえって将来の脅威になると恐れられていたのです。村の秩序維持が何より優先され、個人の才能が、道徳律に違背することがないようにするのが村里の教育でした。そのような制約は、村に住む者が生きていくためにやむを得ないことであつたともいえます。今であれば、秀でた一人の才能が、村の発展を救う大きな意義と潜在能力をもっているのにということが出来るでしょう。しかし、当時の農山漁村では、共同体の生命力がなければ個人の生命もないほど貧しい暮らしを強いられていたのです。

翻って、現代の私たちは、身分制度があるわけでもなく、知恵を出すことで自分の身に危険が迫るわけでもありません。

個人は尊重されるべきでしょうし、共同体がなければ、一人では生きていくことはできません。個人と共同体どちらが大事かと問われれば、どちらも大事と答えるしかありません。私は、そのような答えを出すための葛藤こそ人間の成長にとって大事だと思うのです。社会が、一人一人の多様な価値観を受け容れるためには、家庭において公的領域には、いえ、私的領域においてさえも、容易に答えの見つからない葛藤する場面が多々あることを学び、そのことについて思考を重ねる教育が行われることが必要なのではないでしょうか。



8 月 23 日(土)に行われた日本家庭教育学会 30 周年記念大会から、くわが提言—家庭教育をどう推進するか>として、個人発表された内容をご報告申し上げます。

### 「台湾に暮らす日本人の子育て環境と教育について」

家庭教育アドバイザー  
富田加奈子



近年、在留邦人と国際結婚は増加している。台湾在留邦人はおよそ 1 万 8 千人、台湾は邦人が多い地域である。

筆者は、台湾に暮らす日本人婦人を対象にアンケートを実施した。「日本と比べ台湾での子育てはどうか」の問いに、過半数が「良い」「まあ良い」と答えた。「子供を成人まで台湾で育てるとしたら、子供を育てる環境として日本と台湾のどちらがいいか」の問いに 47%が「どちらかという日本」「絶対日本」と答え、「絶対台湾」は 3%だった。台湾が子育て環境として「良い」と思う理由を回答してもらったところ、「台湾は人々が親切で優しいので、子供も優しい心を育む気がする」「公共の場所、乗り物やレストランで台湾の人が子連れに

優しい」等が寄せられた。逆に、台湾での子育てを不満に思う理由として、社会の風潮が運動や生活体験より学力重視であることへの不満が多かった。

また、「子供を見る人が他におらず、夫が出張に行く人」は 47%を占めた。つまり、孤独で育児をしている日本人婦人は多い。筆者は家庭教育師として子育てを応援する活動を始めた。2013 年より参加者はのべ 632 人、今後も台湾での子育てを応援する活動を続けたいと考える。

### 「自然療法からみる家庭教育と実践」

家庭教育支援協会 理事  
家庭教育アドバイザー  
松本美佳



私は自然療法を利用したセラピストとして、また自然療法の知恵や概念を家庭教育の中に取り入れ、活かしていくことを「チャイルドケア」と体系づけ、その普及活動を行っている。その活動の中で、自然療法のホリスティックな概念と家庭教育の関わりは深いことが良くわかる。しかし、最近の自然療法は、自然療法の方法やツールを利用し、病を治すという対処的に取り上げることが多く、包括的な概念はまだ伝えることができていない。自然療法の有効性は、体・心・精神との調和を図ることにより、免疫力をつけ、自然治癒力を高めるものである。さらには、家庭教育もまた、本来は個・家族・家庭・地域・環境の調和を図り、家庭の力を引き上げそれぞれの生きる力を高めるものである。また、ひとつの画一的な方法

は当てはまらず、それぞれの「調和」を考えなければならない。

そこで、私は子ども・家族・家庭・地域・環境の調和を図るべき活動として、家庭教育アドバイザーの活躍が今後は期待できるのではないかと考えている。社会のめまぐるしい変化や家庭・文化・環境の多様化に応じながら、個々の家庭に細やかに対処し、それぞれの「調和」を考え提案できる役割を担い、実践、結果をあげることができると思う。そのためにも個と全体の関係性を常に捉え、身体的な健康だけを健康と捉えるのではなく、家庭教育の視点からの「健康」も考えていきたいと思う。

11月5日(木)岩手県立生涯学習推進センターの依頼を受け、二川理事長による講演、また理事長、城条理事、攝待理事によるワークショップを開催してきましたのでご報告申し上げます。

### 家庭教育支援担当者のためのプログラムデザイン研修講座の報告

二川早苗

11月5日に岩手県にて、「家庭教育支援担当者のためのプログラムデザイン研修会」が行われました。本講座は、岩手県より当協会にご依頼のあったものです。午前中は、二川による講演会、午後は、岩手県在住の攝待理事を中心に城条理事、二川の三人でワークショップを開催しました。参加者は、教育委員会社会教育行政担当者、及び子育て支援担当者、といった普段から家庭教育に携わっている方々でした。

本講座では、現代の家庭教育が抱えている課題に焦点をあて、そこから真のニーズを洞察し、支援者としてのスキルを学び、最終的には、家庭教育支援事業の新たな展開をつくりだすためのヒントを得るというものでした。ワークショップでは、一般論では括れない岩手県の課題や、広域圏の抱える悩み等について話し合われました。

朝から夕方までという長時間に及ぶ講座でしたが、熱心にメモをとり、討議に参加されるみなさまの熱意に、改めて、家庭教育支援協会の存在意義を見た思いがしました。



### ～ワークショップからのご報告～

攝待逸子

午前の二川理事長の講演をもとに、午後は「子育てのためのミラクルアドバイス」と題してワークショップを行いました。講演のみの参加者1名を除いた18名が参加。また、参加者の6割が震災の被害を受けた沿岸地域からの参加で、やはり子育てや家庭に与えた震災の影響は大きく、参加者の関心も高かったと思われます。

ワークショップは、3グループに分かれそれぞれの地域の抱えている課題やニーズを自己紹介しながら出してもらい、その中から共通する課題を絞り、それぞれのグループから代表に発表をしてもらいました。

仮設住宅での子供の学習ボランティア、子供の遊び場の問題など震災ならではの問題。また、保健師さんからは子育て中の若いお母さんたちのスマホ依存や出産後の子育ては保育のプロである保育士さんに任せ方がよいのではないかと言われた等、ちょっと驚きの相談事例にため息も出ました。

その後15分の休憩をはさんで、支援者としてどのように課題を解決していけばよいかを話し合いました。地域の眠っている人材バンクの掘り起こしの必要性。国や各種助成金等の利用も考えられるが、一番重要なのは“人”の力。自分たち自身がまずは行動することという共通認識を持つことができたと思います。参加者自身も子育て中であり、自分の体験も交えながら非常に活発な意見交換が行われ、私たちも有意義な時間を持てたことに感謝したいと思います。



## 活動報告③ パープル&オレンジプロジェクト 市民ワークショップ 11月10日

11月10日(火)京都府長岡京市女性交流センターの依頼を受け、会員の石井登氏が講師を務め、京都府長岡京市中央生涯学習センターにおいて講座を開催してきましたのでご報告申し上げます。

### 「親育ち・子育て～それぞれの自立を考える～」

家庭教育アドバイザー

石井 登

内 容： 1. 社会環境の変化 2. 何が子どもの能力を伸ばすのか 3. 自立への基礎力 4. 情動・欲望の脳(ホットブレイン)と自立させる脳(クールブレイン) 5. 非認知能力を高める親の姿勢 6. 自律スキル(自制心や克己心)を高める

参加者の「今回の講座内容が事前に知識としてあれば、もう少し子どもたちは自立が早く、自律の能力も高かったかなと思う」「自分が育ってきた過程で両親に何を感じて来たかを振り返ると、子ども達にどう接するべきかが見えてくると思った」などの意見もあり、思春期の子どもの育て方への関心の高さが伺えた。

主催者からの課題としては講師と参加者がともに意見交流ができ、子育てに悩む親同士が繋がり、それぞれが意識変革できる『場』の提供を、今後の事業の中で検討していきたいというコメントをいただいた。

## 活動報告④ 家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会 2月6日

家庭教育支援協会理事

家庭教育アドバイザー

ペンネーム・えみこ

平成28年2月6日、東京 水道橋の倫理文化センターにおいて、日本家庭教育学会27年度家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会が開催されました。講演は杉並区教育委員会社会教育主事 中曽根聡氏より、「杉並区の教育行政について」発表いただきました。後半には、3名の家庭教育アドバイザー、家庭教育師から活動報告が行われ、当協会からは、私より報告させていただきました。日頃、私の仕事は相談ありきで千差万別対応しており、それも自ら相談に繋がる方は少ないのです。その支援の困難さをお話し、地元の講演会で再確認した子どもの貧困についてお伝えさせていただきました。こういう場で日頃の仕事の外側から感じたことやご意見をいただけたことは、とても勉強になりました。

年に1度の交流会です。まだ参加されたこともない方も、ぜひ次回とは言わずとも、いつか足を運んでみてください。

## 活動報告⑤ 家庭教育支援協会 会員研修 2月7日

家庭教育支援協会理事

家庭教育アドバイザー

さかもとゆきこ

今年度、新しい試みとして全国どこに住んでいても参加可能な、八洲学園大学の公開講座を活用した会員研修が実施されました。当日私は会場での参加でしたが、静岡県や岩手県などからの参加もありました。リアルタイムで会場外からの質問に講師の二川さんが答えたり会場の意見が会場の外にいる参加者に届いたり、大変有意義な研修となりました。当日参加が出来なかった方はオンデマンドを利用して研修に参加出来たことは、これもまた今回の研修の意義あることだったと思います。

今後も全国に散らばる会員に向けてこの様な企画があることを切に願います。